

昭和 63 年 度

## 早稲田大学図書館業務報告

—平成 1 年 5 月—

早稲田大学図書館

	も く じ	
〔1〕	主な動き	1
〔2〕	目次	4
〔3〕	主要年間行事	5
〔4〕	参考率ケース展示	6
〔5〕	他展覧会への資料出品	6
〔6〕	主な寄贈図書	6
〔7〕	来訪	7
〔8〕	出張・研修・見学	10
〔9〕	年間刊行物・印刷物	10
〔10〕	図書館協議会	10
〔11〕	人事	11
〔12〕	組織図	13
〔13〕	収蔵図書資料現在総数	14
〔14〕	年間受入図書資料数	15
〔15〕	年間奉仕業務	15
〔16〕	所蔵図書分類別累年合計冊数表	18
〔17〕	学習図書分類別累年合計冊数表	19
〔18〕	各種委員会名簿	20

### 〔1〕 昭和63年度の主な動き

#### 1. 新中央図書館計画

工事は文化財発掘調査のため、昭和62年12月1日地鎮祭挙行以来中断していたが、昭和63年12月20日、1年遅れて再開した。現在、地下の掘削工事が急ピッチで進められている。

62年3月に建築確認申請が認可される際、消防法上かなりの仕様変更の行政指導があり、これに関連して、設計会社より設計修正案が提示された。これについては図書館および建設局で検討を重ね、長期計画委員・主任合同会議で説明の後、63年11月10日総合学術情報センター実施計画委員会において基本的に了承され、11月29日の図書館協議会に報告した。

準備体制として、6月1日付で図書館内に「総合学術情報センター開設準備室」を設置した。館長を室長とし調査役1名、専任職員3名で準備に専念できる体制をととのえた。これに伴い遅れていた研究会議施設検討のための「研究会議施設計画委員会」を7月に発足、大会議場をも含めた検討を開始した。元年5月には変更等のまとめが出来上がる予定である。

館内では昨年度に引き続き、ハード、ソフト両面にわたり委員会活動が行われたが、実務的作業（家具、備品、書架検討など）は準備室がその基礎作業を行うことになった。分類については、4月に全館員への意見聴取を行い、課長会はそれをふまえて、新館開設予定の年度始めより新分類に切り替えることを決定した。これに基づき研究図書配架（案）が検討され、11月より研究図書配架委員会が発足、現在活動中である。

#### 2. 学術情報システム「WINE」の開発

内外の図書館をネットワークで結び、研究者ならびに学生に対して幅広い学術情報の提供を実現させるためのオンライン・システムのソフトウェアの開発は、世界有数の図書館システムである「DOBIS/LIBIS」を母体にしてほぼ完成した。システムの適用業務範囲は利用者システムのほか、発注・受入、目録、貸出管理、逐次刊行物管理などの業務である。

早稲田大学でのシステムの運用は昭和62年度より開始されており、特に所沢図書館においてはシステムが全面的に運用され、いわゆるカードレスの図書館が実現している。63年度からは理工学図書室もネットワークに参加、目録入力を開始し、平成元年度より貸出システムもスタートする予定である。

また最近では外部のデータベースのアクセスも必要になってきたため、初めての試みとしてゲートウェイ方式によりHINET（平和情報センター 新聞記事、雑誌記事）と接続し、全学で検索出来るようにした。

さらに「WINE」は昨年パッケージ化され、他大学図書館等でも使用されることになったが、これに伴い、パッケージ・ソフトウェアの保守業務、見学・デモンストレーションを中心としたサポート業務も、メーカーと契約を締結して行うようになった。

### 3. 和書データベース化事業室の発足

かねてからの懸案であった図書館所蔵の和図書約52万冊（古書資料を除く）の遡及入力について、昭和63年7月よりワーキング・グループで検討をはじめ、その報告書をもとに株式会社紀伊國屋書店との共同作業としてこれを行うことを決定、63年12月1日付で同事業室を新設、4名の専従者をおいだ。

作業場所として12月中は漢籍作業室、1月より12—3号館2階が決まり、平成元年1月より学習図書約35,000冊を皮切りに、3年半の予定で入力作業を開始した。

全てのデータベースを現物から作成するという方針のもとに、可能な限り高精度でかつ統一された形で、なおかつ早い時期に完成すべく鋭意作業を進めている。

### 4. 明治期資料マイクロ化事業の進行

明治期資料の保存とその全国的な集大成を目指して開始した本事業の具体的な成果が、「文学・言語編」の第1ユニット（マイクロフィッシュ500枚）として5月末に完成した。以来、事業は計画通り進行し、年度末までに第6ユニットを完成し公開した。フィッシュ3,000枚、冊数にして約1,200冊分を撮影し終えた。

作業は、複本の調査に始まり、各版の比較検討、書誌データの整備、1頁毎のドライクリーニング等、撮影に至るまでには多くの手順を必要とする。撮影し終わった資料は、中性紙の箱またはバインダーを作って納めており、紙の劣化が現在以上に進まないように対策を講じている。

なお、第1ユニットが完成した5月に、大隈会館において新聞発表を行ない、その内容は主要な全国紙に掲載され、大きな反響を呼んだ。

完成したマイクロフィッシュのネガおよびポジは、本館のマイクロ資料室に保管されている。

### 5. 利用者サービスの改善

- (1) 9月16日より大学院前期課程学生へ和書の館外貸出を通年行なうこととした。

和書3冊2週間（洋書とあわせて10冊以内）

- (2) 視聴覚室のブース利用時間を、20分延長し4月1日より平日午前10時～午後3時50分とした。

### 6. 「生誕150年記念大隈重信展」開催

このたびの展覧会は「大隈重信展」のいわば「決定版」とし、その資料を図録におさめて刊行することとした。都内はもちろん大隈の生誕地佐賀にも調査のため赴いたりして準備を重ねた。その結果、展示した資料総数は424点にのぼった。

大隈重信をめぐる資料が、これだけ一堂に集められたのは初めてといってよいであろう。筆を執らなかつた大隈の極めて珍しい自筆の資料や、新たに発見された大隈邸の着色写真帳などが展示され人目を惹いた。

これらの出陳資料を『図録・大隈重信』（A4判変形・202ページ）におさめて刊行し、来観者に頒布し好評を博した。

展覧会は、昭和63年10月21日（金）より26日（水）までの6日間、小田急百貨店新宿本店11階グランドギャラリー

に於いて行われた。また、会期中の22日より25日までは記念講演会も会場にて催され盛況であった。6日間の総入場者数は5,795名にのぼった。

また、この本展示に先立ち、学内での小展示会も開催された。なお展覧会は、大学主催であり、図書館が事務局となり実施された。

#### 7. 「幕末・明治のメディア展」私立大学図書館協会賞を受賞

7月27日、第49回私立大学図書館協会総大会で「昭和62年度私立大学図書館協会賞」を受賞した。

これは62年10月～11月（名古屋）、11月～12月（東京）で開催した「幕末・明治のメディア展」に対して、同展が極めて好評であり、多数の来観者をえて成功裡に終わったことと、その企画・実施および図録の編纂刊行を館員が行ったことに対してその業績が認められたことによるものである。

#### 8. 「早稲田大学図書館史」編集作業の進展

昭和60年12月に発足した本委員会は、今年度で満3年を経過したことになり、編集作業は最終段階に入った。本書は年誌編と資料編で構成されることになるが、本年度はこの両編について、最終案の作成に取り組んだ。年誌編は第5案を作成、図書館106年の歩みを年表にしてまとめた。資料編は、各項目別に収集した資料の整理に入り、加除修正を施した。9月上旬には2泊3日の合宿を行い、この両作業を進展させた。

#### 9. 「館蔵資料解説図録」のリスト編成

“図書館員ひとり一冊解説を”を標語に始まった編纂の作業は62年秋に、図録に収蔵する候補資料として300点を越えるワーキング・シートが各グループ（5～8人で、1グループ、分野別に21グループ延べ139人）から出された。

目下、そのワーキングシートをもとに、追加されるべき候補資料を加え、広い範囲で項目ごとのリスト編成にかかっている。今後は、各グループと相談しながら、解説対象資料選定—解説執筆—図録原稿選定—校閲—編集作業、と一連の作業が予定されている。